

# 新しい「女らしさ」の構築 —ヴィツキー・バウム『化学専攻生ヘレーネ・ヴィ ルフュア』に見られる新しい女性像について—<sup>1)</sup>

村田 奈保

## 1. ワイマール時代の「新しい女性」について

1914年から18年の第一次世界大戦は、兵役で抜けた男性の穴を女性が埋めるという形で、ドイツにおける女性の社会進出を推し進めた側面がある。その後成立したワイマール憲法では、条件付ながらも女性の参政権が認められ、法的・形式的なレベルでは男女の同権が一応達成された。ベルリンという大都市を中心に、産業化、都市化が進み、巨大コンツェルンによるメディア産業の発達が進展を見せたのはこのワイマール期である。第一次世界大戦の経験とその後の都市化され産業化された社会の出現は、ライフスタイルの変化とともに「女らしさ」の規範にも大きな変化をもたらしたかに見えた。都市部では働く若い女性が増加したが、短い髪に膝丈のスカートを身にまとった若い女性の姿が新聞・雑誌などのメディアに頻出し、「新しい女性」die neue Frau と呼ばれた。新しいモードに身を包み、オフィスやデパートで働きながら都会的なライフスタイルを実現するというこの新しい女性像は、ワイマールのモダニズムを象徴すると同時に、「女らしさ」の規範を揺るがすものとしても捉えられた。同時代の社会学者エルザ・ヘルマン Elsa Herrmann は、ワイマールの

---

1) この論稿は、2005年秋の学習院大学ドイツ文学会研究発表会における発表をもとにしている。その際に多くの方々から、示唆に富んだコメントをいただいた。今後の研究に生かしていきたい。

「新しい女性」は旧弊な家庭に押し込められた「昨日の女性」とは異なっており、合理化された家庭設備の助けを借りて、厄介な家政の仕事をこなして子どもや夫に愛情を注ぎながらも、自分自身のことを考える時間を持っている、と書いている。<sup>2)</sup> ここから見えてくるのは、家庭に縛りつけられた女性ではなく、合理的に家事をこなして自分で考える賢く有能な女性像である。ヘルマンは近代的な合理化に裏打ちされた女性の仕事および自立を肯定的に捉えているが、全体的に見た場合に、断髪や喫煙、スポーツなどに見られる女性の行動の変化は必ずしも肯定的にばかり捉えられたわけではない。出生率の低下、婚姻数の減少と離婚率の上昇がワイマール時代を通して見られるが、国家経済的な観点からこうした現象に対して警鐘が鳴らされ、その矛先が「エゴイスティックな」若い女性、つまり「新しい女性」に向けられたのである。

「新しい女性」の特徴としては、ショートカット、モードな服装、スポーティであること、セックス・アピール、有能さ、エゴイズムなどが挙げられるが、これらは当時新しい女らしさの指標として読み取られていたのである。しかし興味深いことにこの新しい女らしさには「母性」が含まれていない。「職業婦人」も「主婦」も、ジャーナリズムのレベルで理想とされ強調されたのは合理的で有能に仕事をこなすことであり、他者への慈愛や保護といった母性は捨象されてしまったかのようである。むしろ、「母性」はこうした「新しい女性」が示す「女らしさ」とは対立するものとして捉えられていた。フレーフェルトによると、ワイマール後期の1929年、カトリック系の新聞に現代の「家庭の危機」は「母性」が欠けていることによる、として次のような記事が掲載された。

---

2) Herrmann, Elsa: So ist die neue Frau. Helerau (Avalun) 1929, S.24. エルザ・ヘルマンの生没年については現在のところ不明である。1994年に出版されたAnton Kaes編集の「ワイマール共和国資料集」にここで引用したHerrmannのテキストの英訳抜粋が収録されているが、彼女の伝記的データは記載されていない。Cf. Kaes, Anton a.o.(Ed.): The Weimar Republic Sourcebook. Berkeley, Los Angeles, London (University of California Press) 1994, pp.206-208 and p.743.

しかし母はもはやどこにも見つけられない。確かに何人かの「男髪」を目にするし、オリンピックの勝者の女性は見つけられるし、女の子が性欲を満たそうと出ず猫などで声は聴こえる。だが母はどこにもいない。<sup>3)</sup>

現代女性が自分の欲求を満たすことにばかり夢中になったために、家庭の維持に不可欠な「母親」がいなくなってしまうというこの記事の論調は、当時の「新しい女性」に対する批判に典型的に見られるものである。

このように、ワイマール時代には、家事と職業を含めた仕事、スポーツ、自立とエゴイズムという「新しい女性」に代表される女らしさが喧伝される一方で、そうした新しい女性には家庭と結びつけられた母親という母性的な女らしさが欠けているという言説が生み出されている。このような状況から読み取れるのは、「女らしさ」についての社会的な理解が分裂しているということである。

本論文では、1928年から29年にかけて発表された小説『ヘレーネ・ヴィルフュア』に見られる女性性の描き方を分析し、同時にヴィッキー・バウム Vicki Baum (1888-1960)がこの小説の作者としてメディアによって演出されたことによって、「新しい女性」のプロトタイプとして機能した点について考察する。ヴィッキー・バウムに関する研究のうち、特記すべきものとして以下の2つを挙げておきたい。まず、1988年に出されたリンダ・キングのベストセラー化の過程を追った詳細な研究である。キングは、広範な資料収集と分析に基づきながら、当時の出版メディアにおけるディスクール形成の中でバウムが人気作家としてデザインされていく過程を明らかにしている。<sup>4)</sup> もう一つは、1997年に『大都市における女性』と題して出版された20年代のワイマール文化における女性研究の

3) Frevert, Ute: Frauen-Geschichte zwischen bürgerlicher Verbesserung und Neuer Weiblichkeit. Frankfurt/M. (Suhrkamp) 1986, S.188.

4) King, Lynda: Best-Sellers by Design. Vicki Baum and the House of Ullstein. Detroit (Wayne State University Press) 1988.

中に収められたリン・フレイムの研究である。<sup>5)</sup> 当時の大衆メディアの擬似衛生学的なディスクリール形成の中で、女性の身体を読み取るコードが出来上がっていく過程を考察したうえで、リン・フレイムは『ヘレーネ』に見られる女性の類型化が当時のステレオタイプな「女の子」のイメージを喚起させるものであること、そして『ヘレーネ』に示された新しい女性が生物学のイデオロギーを含むものだったとして、ワイマールの後に続くナチスの人種イデオロギーとの類似性を指摘している。

リンダ・キングおよびリン・フレイムのこれらの研究を踏まえたうえで、以下の論考では、小説『ヘレーネ・ヴィルフュア』と作者ヴィッキー・バウムが規範的な「女らしさ」をどのように変え、またどのように新たな女性像を作り出して行ったかという観点から考察を進めたい。

## 2. 娯楽小説の役割

ここで取り上げる小説『化学専攻生ヘレーネ・ヴィルフュア』（以下『ヘレーネ』と略記）は、「ベルリン絵入り新聞」Berliner Illustrierte Zeitung に1928年10月3日から1929年1月13日まで連載された。<sup>6)</sup> 『ヘレーネ』の連載によって「ベルリン絵入り新聞」の発行部数が増え、連載終了直後に単行本の形で出版されている。ヴィッキー・バウムを人気作家にしようというウルシュタイン社のもくろみは読書市場において成功を取め、バウムの小説は「娯楽小説」として広く読者を獲得したのである。

---

5) Frame, Lynne: Gretchen, Girl, Garconne? Auf der Suche nach der idealen Neuen Frau. In: Frauen in der Großstadt. Herausforderung der Moderne? Hrsg. und übers. aus dem amerikanischen Englisch von Katharina von Ankum, Dortmund (Ed. Ebersbach) 1999, S.21-58. オリジナルの英語版は1997年に出版されているが、本稿ではドイツ語訳を参照した。

6) Berliner Illustrierte Zeitungをここでは字句どおり「ベルリン絵入り新聞」と訳しておくが、これは挿絵や写真を豊富に使った週刊誌である。1部10ペニヒという低価格で売られたこの雑誌は、ベルリンを中心に発行部数を伸ばした。

当時の特に女性読者が指南書 Ratgeberliteratur に代わるものとして「娯楽小説」を読んでいたことについて、アメリカの研究者リン・フレイムは次のように指摘している。「小説は、女性が自分自身のことを少し投影し、実際の自分の生活状態の選択肢を考えることができるようなシナリオを提供していた。」<sup>7)</sup> 具体的な問題解決の手がかりを小説に求めたいという読書行動の背景には、結婚や子どもの養育など実生活において直面する問題に対する女性の関心の高さや切実さに比べて、そうした欲求に答える書物が少なかったという事情が考えられる。化学実験の様子などの詳細な取材に基づいて書かれたヴィッキー・パウムの『ヘレーネ』は、こうした女性の読書要求にうってつけの小説だったのである。

上述のような読者側の要求に訴えようとする小説の提供者側の狙いは、単行本化にあわせて掲載された小説の広告に見て取ることができる。ウルシュタインの系列紙である「フォス新聞」Vossische Zeitung の文芸欄の片隅に、1929年2月3日付けで『ヘレーネ』の広告が掲載されている。名刺風のデザインで「stud.chem.Helene Willfür」とタイトルが印刷された下には、フランクフルトの保健衛生官ハーゲン博士なる人物の次のような「公開書簡」が掲載されている。

私はあなたが200万の人々にこの運命 [ヘレーネの運命、引用者] を熟考させたことに感謝します。私は、ヘレーネの運命の葛藤や悲劇を産む性的な問題が、あなたにとっての主眼ではなかったという自分の理解が正しいものと信じます。分をわきまえた、まっすぐで実直であろうとする人間はどんな状況でもそうあり続けられるということを、あなたが広範な読者に示されたことに我々は感謝します。誰でも人生における道しるべを持っているものです。若者の中にもこの道しるべに到達する人間がたくさんいることを願いましょう。<sup>8)</sup>

7) Lynne Frame (Anm.5), S.33.

8) Dr.Hagen, Berliner Illustrierte Zeitung, 3. Februar 1929.

保健衛生官の言葉としてここから読み取ることができるのは、「分をわきまえていて謹厳実直であろうとする人間」はどんな状況に置かれてもその意志を貫くことができる、というメッセージである。彼はこの小説が、若者の性モラルとそれにまつわる「葛藤と悲劇」について、読者に再考させる点を評価している。だがこの小さなコメントは同時に、小説の効用を説いた能書きとも読めるものである。こうした保健衛生官のコメントを添えて、この小説は特に若者の性モラルと社会問題に対する再考を促す効用をもったものとして宣伝されているのである。

同時期にオーストリアの日刊紙「新自由新聞」Die Neue Freie Presseに掲載されたオーストリアの作家でジャーナリストのフェリクス・ザルテンFelix Salten (1869-1945)の書評では、はっきりと「道案内」Wegweiserinという言葉が使われている。ヴィッキー・バウムとも個人的に面識のあったザルテンは、『ヘレーネ』を賞賛するこの書評の中で、この小説が「男性的な意志の強さをもって」ベールを剥ぎ取り、ものごとの核心にせまるものであると評し、同時に作者であるバウムが子育てをする母親である点に触れて、この小説が同時代の読者にとって確かな道案内となると述べている。

現代のさなかに書かれたすばらしい本である。この本で扱われるすべての問題によって、近い将来が見えてくる。卓越した語りのこの小説は、いたる箇所において決然とした男性的な態度で物事を隠す最後のベールを剥ぎ取っている。だが男性的なエネルギーをもったこの顔つきの背後には、穏やかで賢いヴィッキー・バウムの顔が微笑んでいる。まだ若く美しく、しかも既に大きくなった子どもの母親である詩人の顔が。つまり彼女は、若い世代の同志であり同時に両親の道案内でもあるのだ。彼女はそのすばらしい本によっても、この両者であるだろう。すなわち、読者のうちの老若男女すべてに歓迎された仲間となるだろう。<sup>9)</sup>

9) Salten, Felix: Roman der Studentin. In: Neue Freie Presse, 17. Februar 1929. Zit.nach: Anjum, Katharina von: Vicki Baum. Frankfurt/M. (Neue Kritik) 1998, S. 86.

上記の引用からは、母親でありなおかつ「詩人」であると認められた作者ヴィッキー・バウムのパーソナリティのうちに、「若者の仲間」と「両親の道案内」の両方の性格が読み込まれていることが分かる。このように読み込まれた作者に、様々な年齢と性別の読者にとっての「仲間」と「道案内」の役割が与えられ、読者は本のうちに現実的な問題に対する具体的な解決の手がかりを見出せるのだ、という形でヴィッキー・バウムのテキストが「指南書」として性格付けられている。

こうした読書空間の中でヴィッキー・バウムとその小説『ヘレーネ・ヴィルフュア』が女性のイメージを新しく構築したことを以下の章で明らかにしたい。

### 3. 「新しい女性」の構築

#### 3.1. 女同志の関係

この小説の主人公ヘレーネは、化学を専攻する勤勉でまじめな、そして有能な女子学生で、博士の学位取得のため実験と研究に励んでいる。この小説はそうしたヘレーネの大学生活を中心に展開する。若い女子学生が化学を専攻して、妊娠や恋人の自殺、大学の転校などの苦勞の末に生物化学の研究所で働いてホルモンに作用する新物質を発見し、それが商品化されて職業的な成功を収めるといふ主人公の成長物語と、最後に恩師である化学教授アンブロシウスのプロポーズを受け入れるというハッピーエンドの構造をもっている。その中で前半部は大学の学生生活の人間関係が中心に語られている。様々な女性のタイプが登場するが、<sup>10)</sup>

10) 前掲の論文においてリン・フレイムは、『ヘレーネ』中の登場人物たちが、グレートヒエンタイプ、アメリカから流入したガールタイプ、ギャルソンタイプという女性のステレオタイプに当てはまるとしている。Lynne Frame (Anm.7), S.36f. 本稿では、この研究で示された小説の登場人物の描かれ方と当時広まっていた女性のステレオタイプとの関連を踏まえたうえで、類型化された女性登場人物の中でもキャリアと性的指向において主人公ヘレーネと対照をなすグドゥラ・ラップの描かれ方に焦点を当てる。

ヘレーネの友人関係においては異性愛の恋愛が基本であり、女ともだちの間では恋愛の悩みが話題となっている。ヘレーネの同級生マルクスの恋人フリーデルは、ハイデルベルクの富裕な家庭の娘で、コンサバティブな女の子タイプである。フリーデルは自分の恋愛の悩みや結婚について年上のヘレーネに相談し、ハイデルベルクを離れてからも二人の間には手紙のやり取りがある。これに対してヘレーネのルームメイトで考古学を専攻するグドウラ・ラップは、そうした男女の恋愛関係とそれを媒介して成立する女同士の友情関係といった人間関係からは外れた存在として描かれる。

部屋の中には二組のカップルが座っていた。マルクスとフリーデルがベッドの一方の端に、ライナーとヘレーネがもう一方の端に。グルラップはのけもので、半端ものだった。彼女の手は近頃、どんなきっかけでも神経質にわなわなと、あるいは細かく震えるようになった。グルラップは最近サンスクリット語を勉強していた、才能豊かで義務感の強い、いつも片割れのグルラップは。(下線は引用者、以下同じ)<sup>11)</sup>

In der Bude saßen zwei Liebespaare herum, Marx und Friedel auf dem einen Bettrand, Rainer und Helene auf dem andern. Das Gulrapp war so ausgeschlossen, so überzählig, ihre Hände hatten in letzter Zeit begonnen, bei jedem Anlaß nervös zu flattern und zu zittern. Es lernte neuerdings Sanskrit, das talentvolle, pflichteifrige und einschichtige Gulrapp –

ヘレーネと同様勤勉で才能にも恵まれた彼女は、仲間内からdas Gulrappと中性で呼ばれ、異性愛カップルの集まりの中では「はみ出しも

---

11) Baum, Vicki: chem.stud.Helene Willfür. Berlin(Ullstein) 1929, S.63. 以下HWと略しページ数のみを本文中に記載する。小説からの引用については、対照のためにドイツ語原文を付す。



の」である。「アウトサイダー的で病的な傾向」をもち、「過酷な秘密」を内面に抑え込んでいるグルラップは、ヘレーネとの身体的接触を極端に拒む。<sup>12)</sup>ヘレーネがハイデルベルクを去り、グルラップに別れを告げる場面では、精神だけが膨張し身体性が消滅していくという形でグルラップの神経症が描かれている。

彼女の小さな姿はますます身体を失い、眼鏡の奥のまなごしはますますヒステリックになり、古い象牙の塔から生まれた薄い手はますます震え、勝利に満ちた完成、内心の平穏と彼女の安らぎのない性質のただ中の生活は、ますます遠ざかっていく。私たちはこの曇って蒸し暑い午後の時間にお前に別れを告げる。お前は才能のある人間だ、お前は考古学の光になる素質がある。だがグドゥラ・ラップ、学位論文が高の知れたものとなった後では、我々はお前にほとんど期待をもっていない。お前は博士号を取るだろう。だがお前が砂漠の砂から幻想の街々を掘り出すことはないだろう、調査旅行を率いることも、旅をすることもないだろう。  
(HW168)

Immer körperloser wird ihre kleine Gestalt, immer hysterischer der Blick hinter den Brillengläsern, immer zittriger die dünnen Hände aus altem Elfenbein, und immer weiter entrückt die siegreiche Vollendung, die innere Gelassenheit, das Dasein in der Mitte ihrem ruhelosen Wesen. Wir nehmen Abschied von dir in dieser gedeckten, schwülen Nachmittagsstunde, du bist ein begabter Mensch, du hast das Zeug in dir, eine Leuchte der Archäologie zu werden; aber wir haben wenig Hoffnung für dich, Gudula Rapp, nachdem schon die Dissertation nur Stückwerk geblieben ist. Du wirst deinen Doktorarbeit erreichen. Aber du wirst keine phantastischen Städte aus dem Wüstensand graben, du wirst keine Expeditionen leiten und keine Reisen machen.

---

12) HW168.

最終的に彼女の身体は形を失い、「ますますヒステリックになる視線」と「ますます震えが激しくなる手」だけが残される。こうした「象牙の塔」に閉じこもり、取り残されたインテリ像は、大学を去って後にいわゆる世俗的な成功を手にするヘレーネとは極めて対照的である。ヘレーネはそうした「病的」な要素を一切免れているが、同性愛と病とそれに対立する健康的な生という対立を、このヘレーネとグルラップの類型化に見てとることができる。小説の中でハイデルベルクは街全体が脳に喩えられているが、<sup>13)</sup>グルラップはまさにこの言葉によって象徴される精神的・神経症的領域に閉じ込められた人物として描かれている。彼女の「病的」とされる同性愛傾向はこの神経症の領域への閉じ込めと不可分であり、男女の異性愛関係を主題とするこの小説において、彼女は隔離された場所に置き去りにされるのである。

### 3. 2. 「手」の比喩に見られる女性性

一方、小説の中で「女の子」から「大人の女性」へと成長するヘレーネにおいては、子どもへの優しさが備わっていることが強調される。ハイデルベルクへ戻る汽車の中で隣合った女性に子どもを少しの間抱いていてくれるよう頼まれる場面では、子どもを抱いたときの「意外な」感じが「ある種の幸福」を伴うということが描写されている。

寝息をたてる小さな温もりをそんな風に抱くのは何か意外なものだった。それはすばらしいことだった、そこにはそう、ある種の幸福があった。鳥の声を聴くときの、若い犬をなでるときのあの幸福、昨日はまだねばねばしたつぼみだったのが今日には手の形に葉を広げるマロニエの葉を眺めるときの、あの幸福だった。

(HW6f.)

---

13) HW19.

[E]s war etwas Befremdendes, so ein schlafendes, atmendes kleines Stück Wärme festzuhalten. Es war hübsch, ja es war eine Art Glück dabei. Jene Art von Glück, mit der man einen Vogel belauscht, einen jungen Hund streichelt, ein Kastanienblatt betrachtet, das gestern noch klebrige Knöpfe war und heute Blattfinger ausstreckt, die flaumig sind und dennoch glänzen und die sich ganz sacht bewegen im Sonnenschein—

ここでは体験話法によって語られることで、赤ん坊を抱いた幸福感がヘレーネの体験として伝わってくる。ここで語り手は饒舌になり、その感覚が小鳥のさえずりを耳にしたときや犬をなでたとき、丸くなった櫛の葉が開くの眺めるときなど、自然に触れたときの幸福感になぞらえる。さらに、子どもに接した時の感覚が語られ、「幸福を感じ取る優れた才能のある」ヘレーネはその体験およびそれがもたらす感覚を「最高にすばらしい体験として記憶」する。<sup>14)</sup>

ヘレーネにはこのように子どもに対する優しい感覚があるだけでなく、生命を育てる力があることが、彼女が「花の手」Blumenhändeをもつという表現によって比喩的に示されている。

「ええ、あなたは花の手をもっている」とフリーデルは言った。「そういう手があるのよ。その人のもとでは子どもも動物も花も、すべてが成長する、そんな人がいる—でもそうでない人のところではすべて死んでしまう。あなたのところではすべてが大事に扱われるわ」(HW64)

“Ja, du hast Blumenhände”, sagte Friedel. “Das gibt es. Es gibt Menschen, bei denen gedeiht alles, Kinder und Tiere und Blumen— und anderen stirbt alles ab. Bei dir ist alles gut aufgehoben.”

14) HW7.

すべてを大事に扱い、子どもや動物、花を成長させるというこの「手」は、子どもや動植物を育てる仕事の換喩として読むことができる。女性の役割とされてきた仕事に従事するその「手」はしかし、ところどころ薬品のしみができ、指の間は実験に使う薬品で荒れ、赤く熱をもっている。<sup>15)</sup> ヘレーネの手は、生命を育てる仕事を引き受ける女性の手が、同時に化学実験という仕事にも従事していることを表している。生命を育てるという女性の仕事が、産業と結びついた化学の領域に拡がったことが小説という形式のうちに表されているのである。小説においては、そうした生命を育てるという女性的役割をヘレーネが化学の分野においても担うことによって、生命力の源としての若さを取り戻す「若返りの薬」を開発するに至る。その限りでは、小説中のヘレーネの化学分野における仕事は、従来男性が従事してきた学問領域において単に女性が成功するというだけではなく、生命を若返らせるという女性性と結びついた仕事としての新しさをもっていたと考えられる。

### 3.3. 生命力と女らしさ

開発がひと段落したとき、ヘレーネは鏡を見て「なんて私は年を取ったんでしょう」と感慨をもらす。彼女もまた若返りたいと思うのだが、薬を飲む代わりにエナメルの靴ときれいな服を買おうと考える。子どもには靴や自転車を買ってやり、自分にはエナメル靴ときれいな服を買うヘレーネは、薬によって直接若返るのではなく、そこから得た収入によって自分と子どもの生活を整えることを選ぶ。

一方、ヘレーネが開発した薬は市場を媒介して、それを服用したアンブロシウスに活力を与える。

---

15) HW19.

屍にいっぺんに生命が蘇った。自分というものをもう一度実感して勇気がわき、仕事をしようという気になった。初めはだめだった。でもそれから非常にゆっくりと、調子がよくなったんだ。とはいっても精神が薬に反応するのは何ともいえない、気味の悪いものだ。自分で試してみたこととはいえ、そんな効果は否定したいよ。(HW296)

Und auf einmal kam wieder Leben in den Kadaver. Ich spürte mich wieder, ich bekam Mut, ich versuchte zu arbeiten. Zuerst ging es nicht. Und nachher, ganz langsam, ging es dennoch. Unheimlich trotzdem, tief unheimlich, daß die Seele auf Pillen reagiert. Ich möchte es negieren, obwohl ich es selbst erprobt habe.

薬の効果は「気味が悪い」ほどだったが、おかげで彼は仕事をする活力を得て研究書を書く。当時まだ男性が支配的だった学問領域での女性としてのヘレーネの成功は、本論3章2節で考察したように、化学技術への従事によってもたらされたものである。それに対してアンブロシウスは、その技術の助けを間接的に借りながら、化学の専門書を書くことで職業を成り立たせ、生産性を維持している。ここに、男性と女性の学問への関わりの違いを読みとることができる。

さらにアンブロシウスは、薬の効果による若返りだけでなく、ヘレーネとの結婚を助けにして自分の仕事を完遂させようとする。

私はもう君を離さない。私と一緒に来て欲しい。すべてを放り出して私のところにとどまって欲しい。もう回り道はよそう。時期が来たんだ。君は私を助けるんだ、私は助けが必要なんだ。それほど私は目が悪くなったし、それほど不器用にもなった。大きな仕事を考えているんだ。それは君なしではできないよ。私は君なしにはいられない— (HW307)

Ich lasse dich nicht wieder von mir. Du mußt mit mir gehen. Du mußt alles lassen und bei mir bleiben. Keine Umwege mehr. Es ist Zeit für

uns. Du wirst mir helfen, man muß mir helfen. Ich sehe so schlecht. Ich bin so ungeschickt geworden. Ich habe eine große Arbeit vor. Ich kann sie ohne dich nicht machen. Ich kann dich nicht mehr entbehren-.

ヘレーネはプロポーズを受けるが、それによってこのカップルは若返りの薬に頼らずに「薬がなくても切り抜かれる」生き方を選択することになる。ヘレーネはアンブロシウスとの未来の夫婦関係において、夫の仕事の支えとなる役割が期待されているのであり、自らもそれに同意しているのである。

### 3. 4. 聖母像の引用と変形

このようにヘレーネは、「すべてのものを育てる手」によって表された生命を育てる技能をもつことで、仕事をこなしながら子どもを育て家族を支えるという、働く母親像を体現している。

そこで次に、この小説における母親像について考察したい。

小説のクライマックスにおいて、母親となったヘレーネに再会したアンブロシウスの視線によって、ヘレーネに聖母のイメージが重ね合わされる。休暇で訪れたイタリアの海岸でアンブロシウスは、子どもをつれたヘレーネにそれとは気づかずに見とれる。

この岩礁の上に女性が一人座っていた。彼女はほんやりした光を浴びてそこにまったく動かずに座っていた。彼女の体はまるで黒い岩から生え出ているかのようだった。[中略] この女性とこの晩はとてもよく合っている、一つになっていて、とても美しい。アンブロシウスはその場に座ったままだったが、そんな彼をもこの植物的な存在、植物のように満ち足りた息遣いと静止は捉えたのである。(HW285f.)

Auf dieser Klippe saß eine Frau. Sie saß ganz reglos dort, von dem ungewissen Licht getroffen, und ihr Körper sah aus, als wüchse er aus dem dunklen Klippgestein hervor. [...] Diese Frau und dieser Abend waren so zusammengehörig, so eines und sehr schön. Ambrosius blieb sitzen, und auch ihn ergriff dieses vegetative Da-Sein, dieses pflanzenhaft zufriedene Atem und Stillhalten.

調和と植物的なイメージを喚起する彼女を、アンブロシウスはアンセルム・フオイヤーバッハの「ナナ」の絵と重ね合わせる。19世紀後半の画家フオイヤーバッハはワイマール時代に愛好されており、「ナナ」の絵の引用によって聖母のイメージが当時であれば容易に喚起されたことは想像に難くない。フオイヤーバッハはイタリアで出会ったナナという女性をモデルにマドンナを描いているわけだが、彼のマドンナの絵は調和的で理想的な女性像を想起させるものである。小説の中ではこのナナが、アンブロシウスの視線を通してヘレーネに重ね合わされる。

フオイヤーバッハのナナだった。同じ姿勢、同じ大きさ、重み、人を寄せ付けない様子。そして前を向いた顔のラインも同じだった。(HW287)

Es ist Feuerbachs Nana. Die gleiche Haltung, das Große, Schwere, Geschlossene. Und die gleiche Linie im fortgewendeten Gesicht.

彼は泊まっているホテルの隣室で、彼の「ナナ」であるヘレーネが子どもと戯れる声を聴き、しばらくしてからふと窓の中の様子が目に入り、思わず息を呑む。

彼は眠っている子どもと、頭をたれて燃え落ちるタバコを安らいだ手にもちながら本のページをめくる女性を見た。(HW289)

Er sah das schlafende Kind und die Frau, die Blatt um Blatt eines Buches umwandte, mit gesenktem Kopf und eine herabbrennende Zigarette in der ausruhenden Hand.

ここでは聖母子像を思わせる眠る子どもと母親の構図が描かれている。ただしこのマドンナは、燃え落ちるタバコを手にし、休暇先でも本を読むマドンナである。彼は彼女が読む本はゲーテのイタリア旅行かラスキンあたりだろうと考えるが、実はそれはアンブロシウス自身が書いた化学の専門書だった。アンブロシウスがヘレーネの姿に見ようとした植物的で自然との調和を暗示する母親という女性像は、「化学の専門書」と「タバコ」によって、見事に裏切られているのである。

### 3.5. 自立した母親像の演出

このようにヘレーネは、子どもへのやさしい愛情、化学薬品で荒れた生命を育てる「手」をもつという点では女性的な感性と技能を備えている一方で、そこに古典的な聖母像を重ねようとする試みはタバコと化学専門書という女らしさとは別の指標が入り込むことによって失敗する。既存の女性イメージの適用を失敗させる点が、まさに「新しい」「女性」と言えるだろう。

「働く母親」のイメージ構築は、この小説が連載された雑誌メディアにおいて積極的に行われている。この小説の連載終了時、BIZには子どもと一緒にバウムの写真が作者の写真として掲載されている。子どもと向き合ってくつろいだプライベートな時間を過ごす母親として作者の姿を伝えるこの写真では、小説連載という仕事を終えた作家の「母親」としての側面が強調されている。この写真からは子どもとの親密な関係と幸福感が喚起されるが、それによって母親業と作家業の両方をこなす女性としてのヴィッキー・バウムという像が作り出されているのである。本論



第2章において考察したように、ザルテンの書評においても作者が母親である点を取り上げられ、テキストの読み方が方向付けられている。このように、作家でありかつ母親であるというヴィッキー・バウムの作者像が構築され、この作者が書いたテキスト『ヘレーネ・ヴィルフュア』とともに働く母親という「新しい女性」像が作り出されているのである。

## 4. 結び

以上見てきたように、小説『ヘレーネ・ヴィルフュア』と作者ヴィッキー・バウムは「ベルリン絵入り新聞」というメディア上で互いに呼応し合う形で、働く現代的な母親という「新しい女性」を形成している。しかし、『ヘレーネ・ヴィルフュア』の考察において示したように、ここに古典的な理想の女性像を読み込むことはもはや不可能になっている。「手」の比喩に示された生命を育てる仕事は、単に子どもを育てる母親の仕事、家庭における母親の仕事の領域を超え、変化していることを示していた。生命が学問と産業における追求の対象となり、そこに「母親」として子どもを育てる女性が動員されていることを、小説中の「手」の比喩は示しているのである。女性の手は、化学産業の中で「若返りの薬」という形で生命力を再生産していくのである。このように見えてくると、女性的な資質として考えられがちな「母性」は、もはや単純な「女らしさ」として規範化できるわけではないことが分かる。同時代において一方で「母性」の喪失が叫ばれた中で、『ヘレーネ・ヴィルフュア』とヴィッキー・バウムが提示した新しい女性像は、一つの役割の中に女性を限定してしまう見方を変えていく力を持っていたのである。

(学習院大学人文科学研究科ドイツ文学専攻博士後期課程3年)

# Die Konstruktion der neuen Weiblichkeit

## Über die Neue Frau in Vicki Baums Roman „chem.stud.Helene Willfür“

Naho Murata

In den Massenmedien der Weimarer Zeit wurden neue Frauentypen produziert, die den neuen, großstädtischen Lebensstil führten und ein modernes Frauenleben repräsentierten. Solche Frauentypen, die man unter dem Begriff ‚Neue Frau‘ zusammenfasste, symbolisierten damals die moderne Weimarer Kultur. Haarschnitt, Mode, Sportlichkeit und Leistungsfähigkeit — all dies entzifferte man als Zeichen der Neuen Frau und wurde als Merkmal der neuen Weiblichkeit aufgenommen. In diesem Bild der neuen Weiblichkeit fehlt jedoch die Mutterschaft, die immer wieder für die Begründung der ‚natürlichen‘ Rolle der Frau in Anspruch genommen wurde. Gerade deshalb wurden in den konservativen Medien wie den katholischen Zeitungen und auch den bürgerlichen Frauenbewegungsorganen die neuen Frauentypen und deren Lebensstil negiert oder kritisiert. Die Mutterschaft wurde dabei bei den ‚neuen‘ Frauen eingeklagt: Der Kultur der ‚neuen‘ Frau wurde vorgeworfen, dass sie für den Verlust der Mutterschaft verantwortlich sei. Angesichts dieser diskursiven Situation ist das Phänomen der Neuen Frau als ein Prozess der Veränderung der Weiblichkeit zu betrachten. Mit anderen Worten: Das Auftreten der Frauen in der Großstadtkultur veränderte das Bild der Frau, das in den Massenmedien sowohl vermittelt als auch produziert wurde.

In dieser Abhandlung geht es um die Konstruktion des Bildes der

Neuen Frau am Beispiel des Romans „stud. chem. Helene Willfüer“ von Vicki Baum, der als Fortsetzungsroman in der Zeit vom 28. Oktober 1928 bis zum 13. Januar 1929 in der ‚Berliner Illustrierten Zeitung‘, einer Massenzeitschrift, veröffentlicht wurde. Die Werbung für diesen Roman und auch die Rezensionen, die damals in den Druckschriften des Ullstein Medienkonzerns erschienen, empfahlen den Lesern und Leserinnen den Roman als einen ‚Ratgeber‘ zu lesen. Eine solche Charakterisierung des Buches als Ratgeber entsprach dem Bedürfnis der Leserinnen, die in einem Roman Antworten auf sachliche Probleme suchten. In dieser Situation benutzte Vicki Baum diese Zeitschrift, um sich als eine Schriftstellerin darzustellen, die gleichzeitig ‚Mutter‘ ist. Diese Kombination von ihrem Beruf als Schriftstellerin und ihrer Rolle als Mutter charakterisiert nicht nur die Persönlichkeit Baums, sondern sie konstruiert damit vielmehr eine neue Weiblichkeit, die sowohl im Beruf als auch in der Hausarbeit leistungsfähig ist.

Dieses Bild der neuen Weiblichkeit ist auch in ihrem Roman „Helene Willfüer“ zu finden. Als Chemie-Studentin arbeitet Helene sehr fleißig und trotz vieler Schwierigkeiten wie Geldmangel, unehelicher Schwangerschaft, Entlassung aus einem Laboratorium usw. setzt sie ihre Forschungen fort, und entdeckt schließlich ein neues Hormon, welches eine Verjüngung bewirkt. Da das Hormon als Medikament verkauft wird, verbessert sich Helenes finanzielle Situation.

Helenes Tüchtigkeit als Chemikerin und Mutter ist im Körperteil Hand symbolisiert. Ihre Hände werden ‚Blumenhände‘ genannt, durch die alles Lebendige gedeihen könne. Die mütterlichen Bemühungen für Kinder und Familie werden damit als Technik dargestellt. Darüber hinaus sind diese Hände von den chemischen Experimenten rauh geworden, und sind damit Zeichen für die wissenschaftlichen Tätigkeiten, die Helene ausführt. Auf

diese Weise verbindet Helenes Hand die Fähigkeit der häuslichen Arbeit mit der beruflichen Arbeit. Interessanterweise sind beide Fähigkeiten mit der (Re-)Produktion des Lebens verbunden.

Während einerseits Helenes Hand die neue weibliche Tätigkeit repräsentiert, wird andererseits ein neues Bild der Mutter konstruiert. Als Ambrosius, ein älterer Chemie-Professor, im Urlaub an einem Meeresstrand in Italien Helene wieder begegnet, sieht er in ihr zunächst ein Bild von Feuerbachs ‚Nana‘, ein Porträt, welches eine ideale Frau, natürlich aus männlicher Perspektive, verkörpert. Doch der Versuch, in Helene eine solche ideale Weiblichkeit zu sehen, scheitert: Helene liest nämlich rauchend ein Chemiefachbuch. Durch die Merkmale ‚Zigarette‘ und ‚Fachbuch‘ wird das männlich idealisierte Frauenbild destruiert und ein neues Frauenbild wird konstruiert. An diesem Prozess der Konstruktion einer neuen Weiblichkeit ist auch die Autorin Vicki Baum persönlich beteiligt. Das Foto der Autorin mit ihren Kindern, das am Ende der Romanserie in der gleichen Zeitschrift erscheint, ist in diesem Zusammenhang als die Verkörperung des neuen Frauenbildes der berufstätigen Mutter zu lesen. Diese Inszenierung der Autorin in der Zeitschrift hat es zur Folge, dass sie als eine ‚reale‘ Frau verstanden wird, und konstruiert damit ein neues, lebendiges Weiblichkeitsbild. Dieser Prozess der Konstruktion der Weiblichkeit bei Vicki Baum beinhaltet eine Veränderung der Norm der Weiblichkeit und zeigt einen Weg, wie eine Frau in der industrialisierten Gesellschaft leben kann.